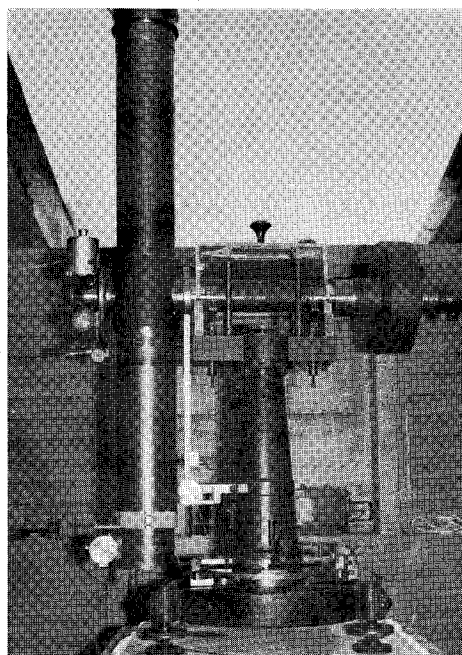


◇ 4月の天文暦 ◇

日 時	記 事
3 20	月 最近
5 14	清明 (太陽黄経 15°)
6 13	朔
14 1	上 弦
15 15	月 最遠
18 17	水星 東方最大離角
20 21	穀雨 (太陽黄経 30°)
22 0	木星 衝
1	望
29 2	下 弦
6	水星 留
30 13	月 最近

ワンシャフ天頂儀

1898年(明治31年)の10月に、日本政府と国際測地学協会(IAG)との間に、水沢国際緯度観測所設置の条約が締結された。この条約によれば、ワンシャフ天頂儀および付属器械設備はIAGが負担することになった。翌年すなわち1899年の9月には臨時緯度観測所が発足し、10月に設置されたワンシャフ天頂儀による国際緯度観測が12月11日に開始された。実際には、この日に観測の態勢に入ったものの、曇天のため星対を観測することが出来ず、12月16日始めて2星対を観測出来た。この天頂儀は口径108mm、焦点距離1289mmで、タルコット法による緯度観測に適している。1回転が約40''のマイクロメーターと1分画が約1''のタルコット・レベル2本を備えている。写真に見るように、望遠鏡は水平軸に連結し、鉛直軸のまわりに180°回転出来るようになっていて、この天頂儀は、国際緯度観測発足当時に、水沢のみならずカルロフォルテ、ユカイア、ゲザスバーグにも配置された。しかし現在でも活躍しているのはユカイアだけである。チャルヂェイ、キタブ、シンシ



ナチには同じワンシャフ天頂儀ではあるが、口径68mm、焦点距離870mmの一段小型のものが配置された。1902年に木村栄初代所長はこの天頂儀による緯度観測から、有名な α 項を発見した。約27年間現役で活動しているうちに、対物レンズにややカプリの兆が見えるとのことで、ワンシャフと同じドイツのアスカニア会社のパンベルヒ天頂儀に切換えられることになった。観測室も新設され、1928年(昭和3年)に正式に現役から退いた。しかし、1930年(昭和5年)にオーストラリアのアデレード天文台に、南半球共同観測のために貸され1941年(昭和16年)に返還された。私共は現在この天頂儀にマイクロメーターの自動読取装置や坪川式4本吊電磁レベルを取りつけて、観測の自動化への試験をこころみている。私共は旧天頂儀という愛称で親しみ、緯度観測所の第1号機として毎日手入れをし、整備に張り合いを感じている。(須川 力)

